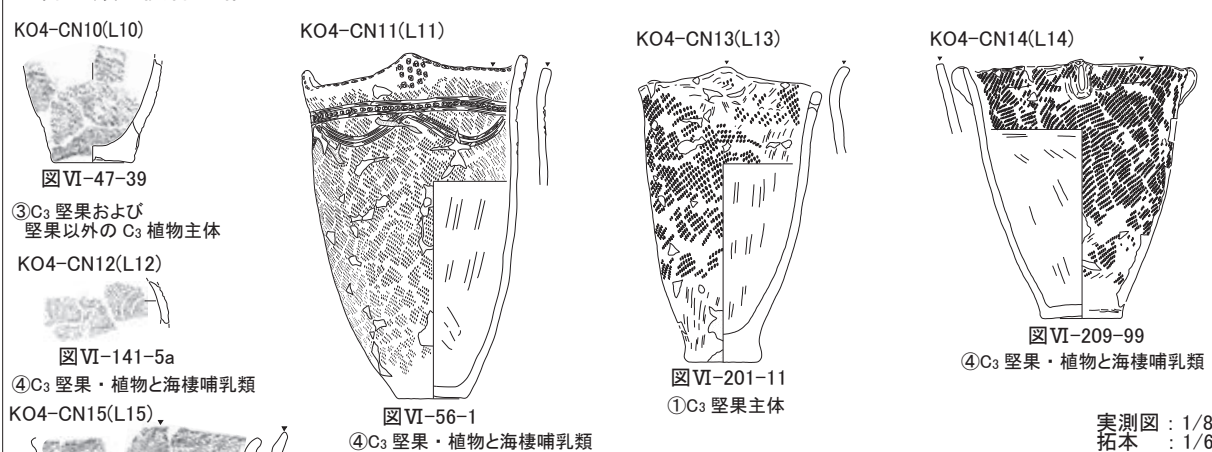


II 群 b 類 (円筒下層 b1~c 式)



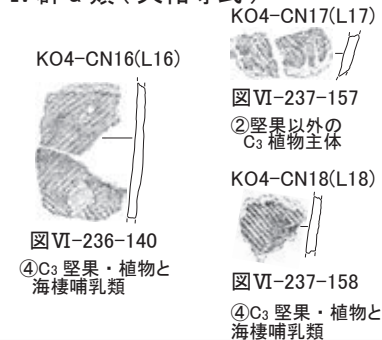
II 群 b 類 (円筒下層 d1 式)

III 群 b 類 (椀林式相当)

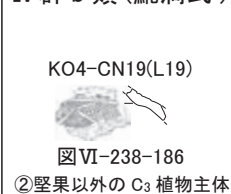


実測図 : 1/8
 拓本 : 1/6

IV 群 a 類 (天祐寺式)



IV 群 b 類 (鯨潤式)



V 群 a 類

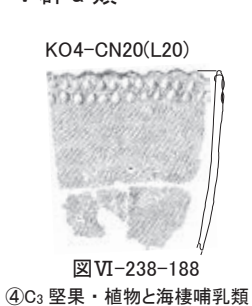


図 IX-12 炭素・窒素安定同位体比、残存脂質分析

料)。バイオマーカー分析では炭素数 20 以上の APAA が海産物起源、18 以下の APPA が陸上動植物起源のマーカーと考えられ、前者は L2・8・9・12・14、後者は L1・3・7・11・16・18 である。L10・13・15・19・20 は未検出である。バイオマーカー分析全体では、魚類や海獣類などの海産物から、植物や陸獣などの陸上動植物を起源とする脂質など、広範囲の動植物の影響が指摘されている。パルミチン酸、ステアリン酸の分子レベル炭素同位体比組成では L9・12・15・17・20 は海棲動物の領域、L2・10・16・18・19 は中間的な領域、L1・3・4・5・6・7・8・11・13・14 は陸獣の領域で、縄文時代前期後半には陸獣、後期前・中葉、晩期前葉には海棲動物主体で、中期後半は中間的な様相を示している。炭素・窒素同位体比分析との比較では概ね①～③は陸上動植物、④⑤と海棲動物に対応するものが多いが個別には異なるものがあり、分析のターゲットの違いによるものと考えられる。

土器圧痕（Ⅷ章 10）

土器圧痕は土器ほか 155,095 点全点を対象とし、表出のものについて 43 点が検出された。また、C3 地区出土前期後半円筒下層 b1～c 式期の土器の一部を対象として、X 線機器により内在するものを分析した結果、19 点が検出された。検出率（表出圧痕、点数比 0.03%）はこれまで担当した幌内 D 遺跡（続縄文時代～擦文文化期、掲載資料中 0.8%）の土器に比べ、幸連 3 遺跡（縄文時代中期～後期、点数比 0.05%）と同様に低い印象である。

種実圧痕で種が判明したものはヤエムグラ、ニワトコ、クマノミズキ、ブドウ属・ノブドウ属？・タデ科属のみである。動物圧痕は昆虫としてクモ？1 点、コクゾウムシ 1 点、甲虫 2 点、多足類 1 点、幼虫 1 点、鱗翅目幼虫の糞 2 点、巻貝 2 点などがある。後期前葉の 2 点を除き、前期後半円筒下層 b1～c 式期である。コクゾウムシは道内では福島町館崎遺跡で円筒下層 d2 式のものが最古であったが、今回の資料は円筒下層 b1～c 式で、それを遡る。C3 地区からは離れ、攪乱出土であるが、繊維が多く、おそらく円筒下層 b1 ないしは b2 式とみられる（図 IX-19）。北海道におけるコクゾウムシは本州からクリの伝播に伴うものと考えられており、その時期が遡ることを意味する。そのほか、穀類等特に吸湿粉を加害するケシキスイムシ科デオキシス属甲虫、鱗翅目幼虫の糞が検出され、後者は土器製作場に蛾の幼虫が存在したことを意味している。

（3）土器の使用痕

炭素・窒素同位体比及び残存脂質分析試料の復元土器を対象として使用の痕跡を内外面のコゲ・スス付着、内外面及び底面の酸化状況を観察し、炭素・窒素同位体比（CN 比）分析と比較した（図 IX-13～15、表 IX-3）。結果として以下のような特徴が挙げられる。

外面スス

- ・ 残存状況は風化によって表面が残存しないものや本来付着していたものが埋没後の影響等で剥落したものなどが想定され、個体によって異なるが、表面の凹凸に関わらず均等に分布するのり状、縄文や沈線内などの窪みのみに残存するもの、全面的、部分的がある。部分的には吹きこぼれなどに相当するものもある。
- ・ 範囲は①口縁部から 17～24 cm、②同じく 6～11 cm、③中央部にあるもの、④ないもの、がある。
- ・ スス付着範囲①は CN 比分類①④⑤、②は CN ①③④、③は CN ①④で付着状況と CN 結果に相関は見られない。

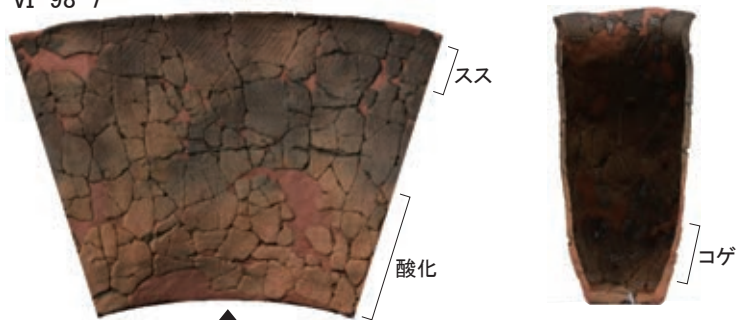
外面酸化

- ・ 外面の被熱による酸化と考えられる橙色の変化は土器により強弱があり、上部は漸移的である。底面から 8～18 cm で、14～15 cm が多い。1 点は観察されなかった。

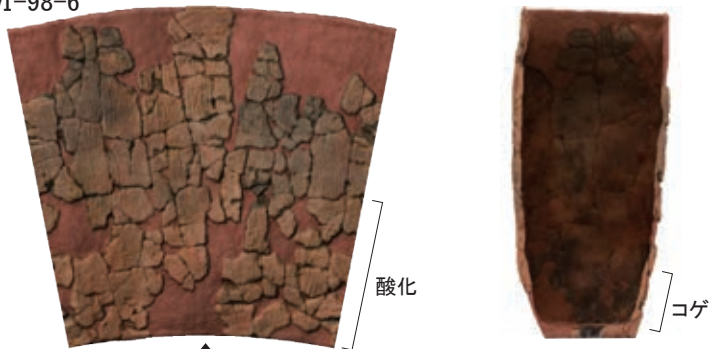


図IX-13 CN 比分析復元土器の使用痕 (1)

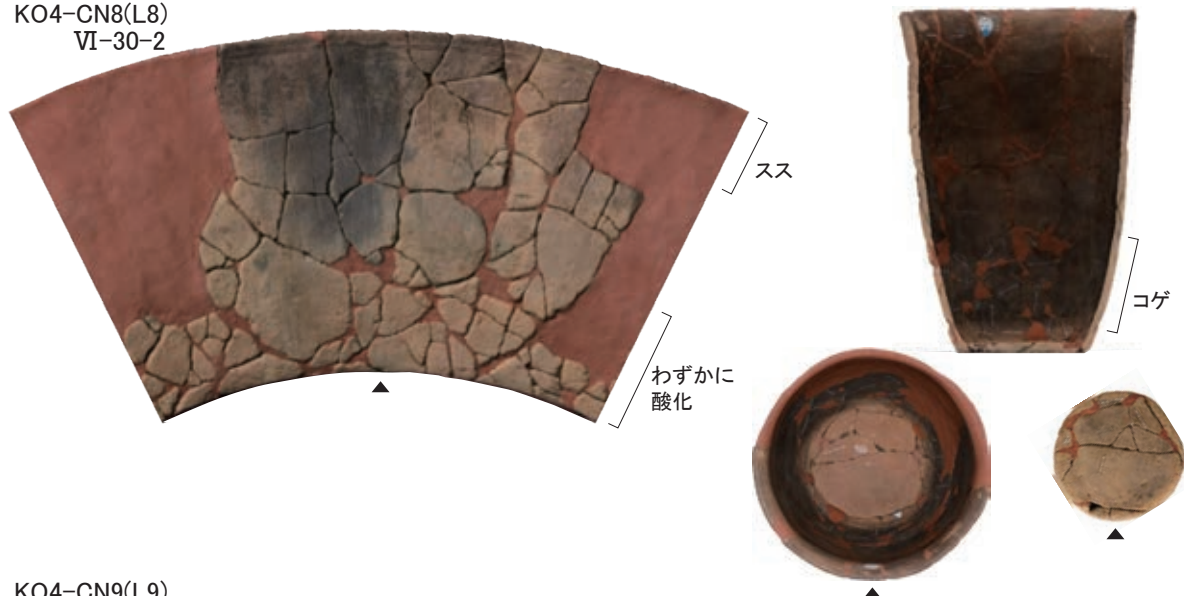
KO4-CN5(L5)
VI-98-7



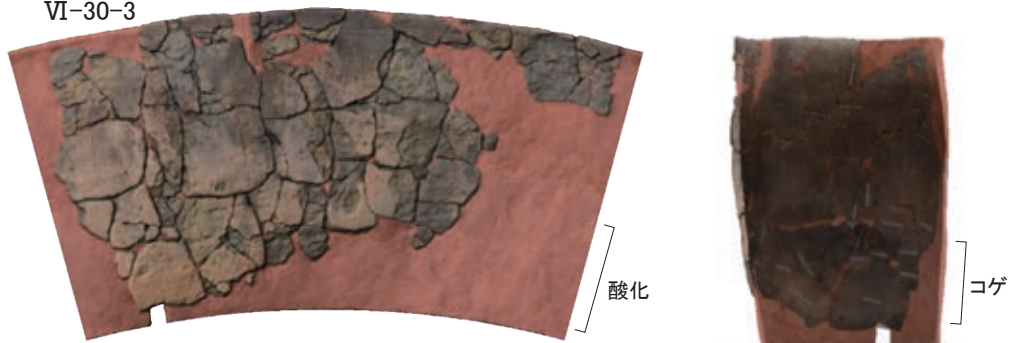
KO4-CN6(L6)
VI-98-6



KO4-CN8(L8)
VI-30-2



KO4-CN9(L9)
VI-30-3



0 5 10cm

図IX-14 CN 比分析復元土器の使用痕 (2)



図IX-15 CN比分析復元土器の使用痕(3)

表IX-3 CN比分析復元土器の使用痕観察表

分析番号	口径 (cm)	器高 (cm)	外面スス	外面スス状況	外面酸化 (最大 cm)	内面コ ゲ(最大 cm)	内面コゲ 状況	内底面直 上コゲ無 し帯	内底面コ ゲ	外面酸化	CN比 分類
KO4-CN1(L1)	20	28	ほぼなし		10	4			なし	なし	①
KO4-CN2(L2)	29	39	上部 21cm	全体厚みあり	8	27	全体厚み あり	2～4cm	なし	一部酸化?	⑤
KO4-CN3(L3)	18	32	なし		11	11			なし	縁辺部	④
KO4-CN4(L4)	19	32	上部 21cm	縄文や沈線内	12	11			なし	縁辺部わずか	①
KO4-CN5(L5)	15	30	上部 6cm	一部縄文内	15	12	上部にも 黒色部あ り	2～4cm	なし	なし	③
KO4-CN6(L6)	15	33	上部 11cm ?	一部縄文内	10	9			なし	やや橙色	④
KO4-CN8(L8)	25	36	上部 10cm	全体のり状	橙色なし	12		1cm	なし	なし	③
KO4-CN9(L9)	22	31	上部 17cm	縄文内、表面風 化	11 以上	13 以上		底部なし 不明	底部なし 不明	底部なし不明	⑤
KO4-CN11(L11)	24	37	上部 24cm	多くは縄文内	18	20		1cm	若干あり	側面と同じ色	④
KO4-CN13(L13)	19	31	中央 9cm	全体にのり状	14	12			なし	なし	①
KO4-CN14(L14)	25	27	上部 11cm	縄文内	14	13			なし	なし	④

内面コゲ

- ・ 分布範囲は 4 ～ 27 cm で、① 5 cm 以下、② 9 ～ 13 cm、③ 20 ～ 27 cm があり、11 ～ 13 cm が多い。
- ・ 外面酸化の高さと概ね一致するものがほとんどで、それらには CN ①③④ が含まれ、CN 結果とは関連しない。
- ・ 外面酸化範囲が内面コゲ範囲に比べて広い例 (K04-CN1 : CN ①)、逆に内面コゲ範囲が広い例 (K04-CN2 : CN ⑤) があるが、CN 比の対象物とは関連せず、対象物より何らかの使用方法の違いの可能性はある。
- ・ 前期後半期 (K04-CN1 ～ 6・8・9) に比べ、中期後半期 (K04-CN11・13・14) は外面酸化・内面コゲともやや高い傾向にあり、器形の違いや加熱方法や火力の違いなどの可能性が考えられるが、底径が小さく胴部が膨らむ形状のため直接火があたる範囲が広がったことが原因であろう。その点ではより高い熱効率が推定される。
- ・ 内底面にはほぼ残存せず、内底面直上から分布するものがほとんどで、一部内底面直上コゲ無し帯があり、内底面の 1 ～ 2 cm 上部から分布するものがある。

外底面酸化

- ・ ほとんどなく、縁辺部のみ酸化するものがある。内底面のコゲが無いことと合わせて底面は地面についていたものと考えられる。

以上のことから、土器の使用痕（外面スス・外面酸化・内面コゲ・内底面コゲ・底面酸化）は外面酸化と内面コゲに相関が認められたが、土器の使用痕と CN 結果はほぼ相関が認められなかった。ただし、K04-L2 は外面の広い範囲に単位質物が厚く付着し、また、他の同時期に比べ大型である。類型が CN ⑤で、外面ススの特徴が海棲哺乳類主体の煮炊きに使われた特徴を示す可能性がある。

民族誌や実験をもとにした土器使用痕研究（小林 2016）によると、土器下部の外面酸化（文献の図 14-3 類）はオキ火寄せ加熱（オキ火を土器の周辺に寄せてじっくりと加熱する）の痕跡で、三内丸山遺跡での円筒下層式の特徴と一致する。また、内面下部のコゲの付着状況は、防カビ処理のための空焚き乾燥を目的としたオキ火寄せ加熱による空焚きコゲとされ、内底面にコゲがないのは底面からの被熱が弱く、オキ火寄せが主体であったことを支持する。本遺跡の内底面直上のコゲ無し帯が 1 ～ 4cm 確認される個体があり、それらはその部分の被熱が弱かったことが推定され、土器底面の厚さを含め 5 cm 程度が埋められていたのではないかと推測される。次に述べるがおそらく砂ピットに据えられていたと考えられる。

（４）砂ピットについて

砂ピットの直径は 10 ～ 21 cm で、14 ～ 20 cm が主体。深さは 3 ～ 27cm で、ばらつきがある。主柱穴の内側で中心付近の周辺に位置することが多い。砂はピットにほぼ純層で詰まり、堅くしまっている。その上面は①床面と同じもの、②床面から 5 cm ほど下に水平にあるもの、③上部が土坑を縁取り、断面形が「凹」字状や窪み状になるもの、の 3 種がある。

土器の使用痕分析からは土中に埋められたものがあると推定されている。土器の底径は 10 ～ 15 cm が主体で砂ピットの直径よりやや小さい。②や③はちょうど土器が抜けた穴のような状況で、土器の抜き取り痕とみることが可能である。砂の上面までの深さは 2 ～ 13 cm で、2 ～ 5 cm の浅いものと 9 ～ 13 cm の深いものに分かれそうである。浅い方は土器の底が埋まるか、それよりやや深く、深い方は底部から 10 cm 程埋まった状態と推定される。土器の使用痕で観察されたものは浅い方に対応する。①においても砂地に置くことで水平が保たれ、安定感が増したのでないかと思われる。これらのこと

から、砂ピットはオキ火寄せ加熱のために、細長く不安定な円筒土器を長時間同じ場所に安定して据え置くための装置であった可能性を指摘したい。位置は床面の汚れた中央付近が多く、火処として利用された縁辺に土器が据えられ、オキ火による調理や空焚きが行われたのではないかと推定される。上述のとおり穴の深さは浅い方では底が埋まる程度で、熱効率の妨げにならず、土器の移動にも労力を要しない。住居内には複数の砂ピットが残るものがあるが、併存や移設等も考えられ、埋められたような痕跡もあることから今後、詳細な検討が必要となる。また、赤変部の発達しない炉の検証も合わせて必要となろう。

砂ピットは噴火湾南西側沿岸から津軽海峡沿岸にかけて狭い範囲・時期に分布する。円筒下層 b1 式から住居中央周辺の小ピットがあることから同じような機能のものが前時期からあり、砂で安定させる方法が局所的に発生したと考えられる。円筒下層 d1 ～ d2 式期には次第に土器の底径が大きくなり、器高も低くなり、安定感のある器形に変化したため、固定の必要性が減少し、次第に砂ピットはその機能を失い、役割を終えたのではないと思われる。

（５）擦切技法・礫石器の形態変化

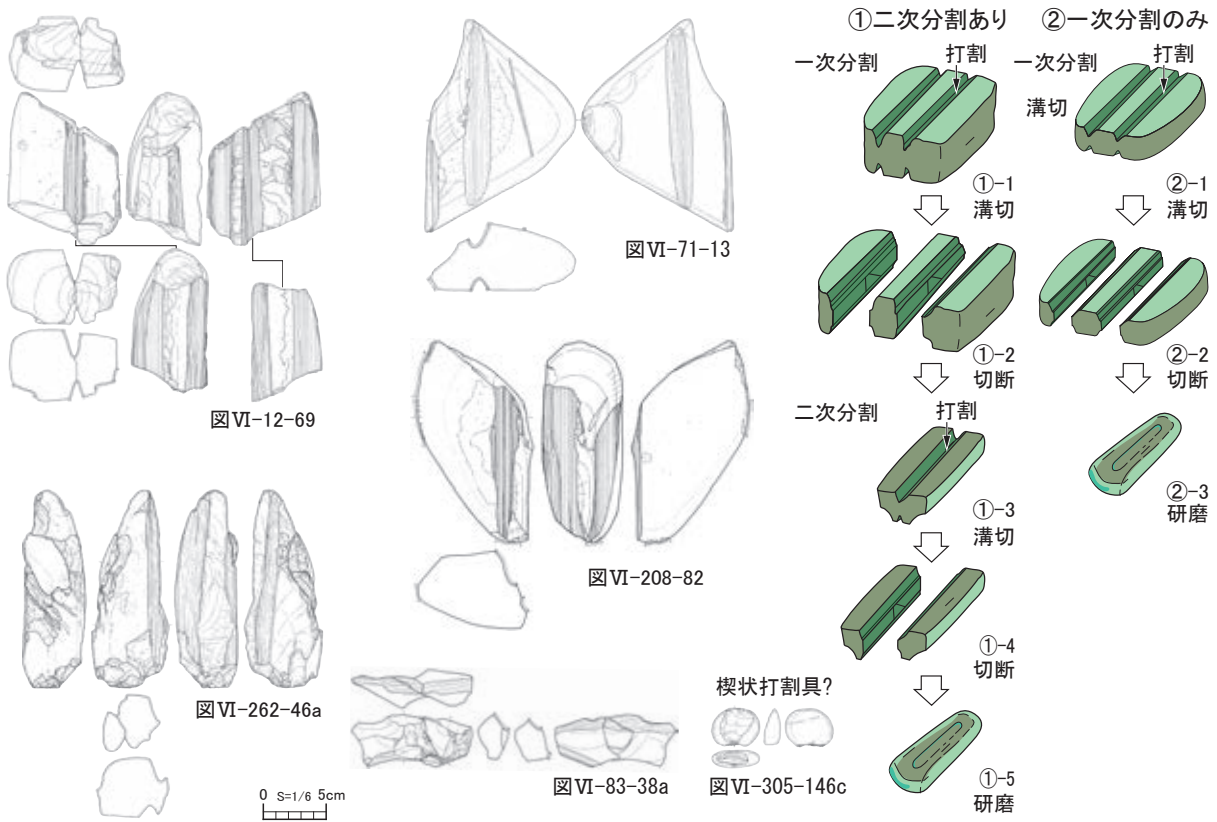
擦切技法

緑色岩製の擦切残片・剥片の接合資料が得られており、遺跡内で素材製作から石斧製作まで行われたと考えられる（図IX-16）。出土する擦切残片は原石縁辺部が多く、それらは素材切断後に廃棄されている。原石は板状であるが、その厚さにより分割の回数が異なっている。図VI-12-69 は厚さ 9 cm の原石を平坦面で切断（一次分割）した後、一次素材を横方向に用い、再び切断（二次分割）している。図VI-262-46a は裏面に分割面があり、板状原石を横方向に石製道具の打撃により分割された可能性がある。図VI-71-13 や図VI-208-82 は厚さ 5 ～ 6 cm で、一次分割のみである。図VI-71-13 正面には浅い溝があり、まずは、石器から転用されたスクレイパーⅦ類のような石鋸より縁辺の鋭い石器で下書きが行われる。次に道具を変えながら途中から石鋸で溝切りしたものと考えられる。溝間は 4 cm 程で、溝切りの「バリ」を除けば 3 cm 程である。原石の厚さが 5 cm 程なので、切断面を石斧の表裏に、原石面を側面に用いたと推定される。緑色岩は原石に堆積構造が残るため、石斧に残る堆積構造の縞模様から原石での素材方向（木製品の「木取り」のようなもの）を判断することができるであろう。

図VI-83-38a は剥片の接合資料である。上面には擦切痕があり、十分に溝切りした後、溝の中に楔状の道具を用いて分割した際に割れたものである。図VI-262-46a・図VI-71-13・図VI-208-82 の切断面にも溝に打点のある破断面が確認され、図VI-71-13 は溝で割れずに失敗したようである。楔状の道具としては図VI-305-145 ～ 147 のような加工痕のある礫を用いた可能性があり、小型の扁平礫の一端を平坦にし、反対側を溝に当てて平坦面を塊状の石で間接技法により加撃したものと推測される。製作された素材は全面研磨により石斧に仕上げられる。

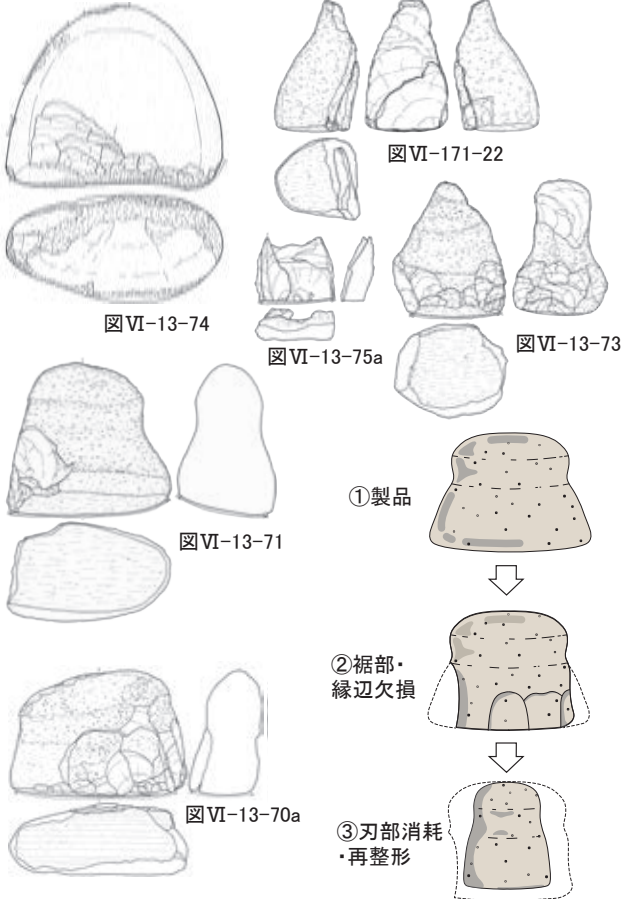
北海道式石冠

各段階の製品や破片、接合資料などから、素材から使用による破損・再加工を経て廃棄されるまでの過程が認められた（図IX-17 左）。図VI-13-74 は扁平な楕円礫がレンガ割り法（上條 2015）によって分割されたものである。前期後半期のものは全面敲打によって持ち手の作出と全体整形が行われる。当初は裾部が外に張り出すが、使用に伴い、図VI-171-22 のような側縁部が破損し、図VI-13-71 のように張り出しが弱くなる。図VI-13-75a の接合資料はそのような側縁を再加工したものと考えられる。図VI-13-70a は表面の剥落が見られ、擦る作業に加え、敲く作業が複合的に行われた結果



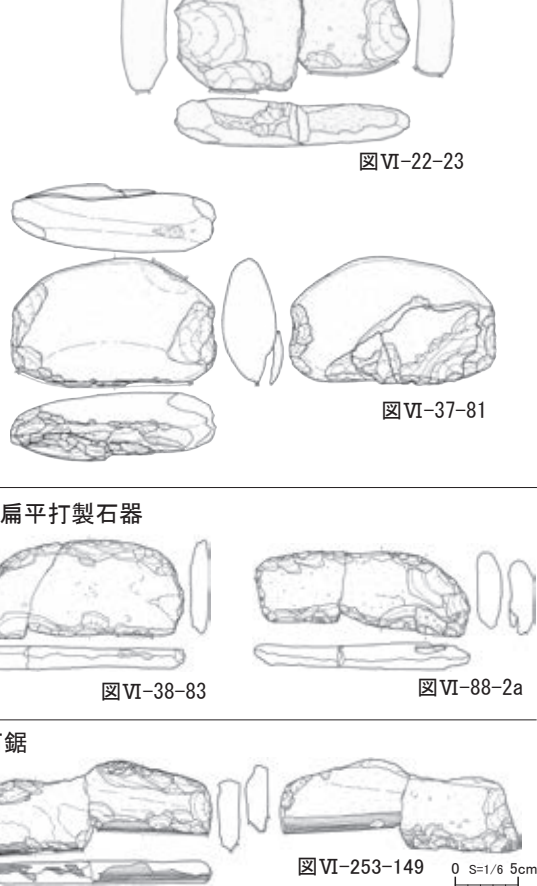
図IX-16 擦切残片・擦切技法進行模式図

北海道式石冠



図IX-17 礫石器の形態変化

すり石



を示している。このように破損・再加工が繰り返され、さらに持ち手部分も再加工され、小型化していく。刃部も損耗し、石器の丈が低く変化し、図VI-13-73は最終形で、廃棄されたものとみられる。

すり石・扁平打製石器・石鋸

折れ面での接合や破損に伴う剥片の接合資料が得られている（図IX-17 右上）。すり石の図VI-22-23は中央で折損後、右側の破片が継続して使用されている。折損後の使用により刃部が損耗し、1.5 cm程器高が減少する。図VI-37-81は本体の台石などへの敲打により裏面に剥落が見られる。剥落剥片は線状の打面が特徴で、すり石にも下面の刃部平坦面に長軸方向の筋状の溝が観察されるものが多く、両者には関連がある。

扁平打製石器は図VI-38-83、図VI-88-2aなど折損後に片方の破片が再利用され、刃部が損耗するものがある。しかし、折れ面周辺のみ部分的で、それほど再利用頻度は高くない（図IX-17 右中）。

石鋸の図VI-253-149は折損後、片方の破片が再利用され、1.5 cm程器高が減少する（図IX-17 右下）。刃部には研ぎ直しのための剥離痕があり、擦切作業と刃部の鋭角化のための再加工が繰り返されたようである。石鋸は刃部が複数あるもの（図VI-304-137など）があり、重度の使用が認められる。

以上、礫石器の製作と再生に関するライフヒストリーを概観したが、北海道式石冠や石鋸は繰り返し使用され、破損しても再利用される一方、すり石（図VI-22-23は例外的）や扁平打製石器は再利用頻度が低い。これらは石材の入手難易度や石器の管理性の高さが異なることが考えられ、今後は周辺の遺跡や石材環境の異なる遺跡との比較が必要となろう。

5 総括

木古内町の遺跡の変遷については幸連3遺跡の報告で概観した（北埋調報343、VII章4・5）。ここでは幸連4遺跡の主要時期である縄文時代前期後半を中心として、さきのまとめに今回の調査結果を加える形で総括したい（表IX-4）。

木古内町では縄文時代前期前半～後半円筒下層a式期にかけて住居は検出されていない。円筒下層b式期になると幸連4遺跡をはじめ、釜谷遺跡、釜谷5遺跡、大平遺跡などで突如、大規模集落が出現する。この時期にはそれまで未検出の多くの文化的要素が確認される。扁平打製石器、光沢石器、クリに関する証拠、「出来島」産黒曜石、砂ピットである。

扁平打製石器は東北地方北部の円筒下層a式直前深郷田式期に出現し、円筒下層a・b式期には海を渡り、松前半島に分布を広げ、道南では後期初頭まで残存する（上條2015）。光沢石器は北海道では主にスクレイパー側縁に光沢が残る石器である。分析ではAタイプ光沢と判定され、イネ科の植物の切断に用いられる。北東北では早期後半に出現し、石匙に光沢が検出される（高橋2007）。幸連4遺跡でも同じ技術形態学的特徴を持ったつまみ付きナイフが組成するが、光沢石器としてはスクレイパーが主体を占める。クリは概ねこの時期に導入されるが（山田・柴内1997）、今回クリの害虫とされるコクゾウムシの土器圧痕が検出された。炭素・窒素安定同位体比分析ではC₃堅果を主体とする土器がこの時期検出されており、残存脂質分析ではこの時期に陸生生物の利用が高く、中・後期では海産生物主体に変化している。生業に関しては、北海道は通時代的に海産生物主体と考えられてきたので特異な状況である。本遺跡では黒曜石製石器は非常に少ないが、「出来島」産黒曜石が複数点出土し、原石で搬入された館野6遺跡の例などこの時期の特徴として挙げられる。砂ピットは円筒下層b1ないしb2～d2式期に検出される。類似するものに床面砂質土があり、砂ピットにやや先行し、両者とも北海道内に限定されそうである（高橋2001）。

これらを整理すると、円筒土器はもちろん、扁平打製石器・光沢石器・クリ・「出来島」産黒曜石

はこの時期に本地域に持ち込まれた要素である。砂ピットは若干それらに遅れる可能性があるが、道南地域で出現・発達したものとみられる。また、北海道式石冠は前期前半に道央部で出現し（小島 1999）、大平遺跡・本遺跡の調査により木古内町周辺では円筒下層 d1 式期以降に移入されたものである。

この地域では先史時代を通じて、津軽海峡を挟んで北東北地域と土器などで多くの共通点があるが、これほど多くの要素、特に生業など文化の根本に関する影響を強く受ける時期は他にはない。

大規模集落の出現もあり、まとまった移住の可能性が考えられる。この時期は縄文海進のピーク後の海退の時期であるが（工藤 2012）、北東北では円筒下層式期に入り遺跡数が増加し、その原因にクリの栽培化を含めた安定した集落の運営が予想される。人口増加に対応し、海峡を渡った後、本地域においても北東北同様に安定した集落運営により人口が増加し、遺跡数の増加につながったと考えられる。

両地域には多くの共通点はあるが、津軽海峡沿岸部では光沢石器に石匙よりスクレイパーが多いなど相違点もあることから、北海道的な要素についても今後検討していく必要がある。

この時期以降、扁平打製石器や光沢石器、クリの利用などは中期の終わりまで継続するが、北海道式石冠や「出来島」産黒曜石の搬入、砂ピットなどは中期前半や前期の終わりまでには消失し、中期後半以降は土器の北東北からの影響が徐々に薄れるのに対応するように生業も北海道的なものに次第に戻り、道央部との文化的つながりが強くなるようである。（鈴木）

表Ⅹ-4 木古内町における縄文時代前期から後期の変遷(北埋調報343、表Ⅶ-2を改変)

時期			住居規模	集落規模	集落密度	内陸分散度	扁平打製石器	北海道式石冠	光沢石器	クリ利用度	コクゾウムシ	C3 堅果(CN 比)	出来島産黒曜石	砂ピット	気候変動
前期	前半	鍛法華・春日町													
	後半	円筒下層a													
		円筒下層b・c	小・中	大	高	低	多		多	高			○	○	
中期	前半	円筒下層d	中・大	大	高	低	多	多	多				○	○	寒
		円筒上層a・b	小	小	低										
	後半	サイベ沢Ⅶ・見晴町	小・中	小	中	高	多	多	多	高					
後期	前半	榎林	小・中・大	大	低	低	多								
		大安在B・ノダツⅡ・煉瓦台	小・中・大	中～大	中	低	多	無							寒
	後半	天祐寺・涌元	小・中	中	高	高	少	無	多	高					
		トリサキ・大津	小・中	中	中	高									
		白坂3													
後期	中葉	ウサクマイC・手稲・鮎瀬													
	後葉	堂林・三ツ谷・御殿山	小・中	大	低	高				低					

住居規模(直径m): 小<5、5≦中<8、大≧8
集落規模(住居軒数): 小<5、5≦中<10、大≧10
集落密度(住居検出遺跡数): 低<5、5≦中<10、高≧10



図Ⅹ-18 スクレイパーの二次加工
(左：図Ⅵ-298-70、右：図Ⅵ-244-64)



図Ⅹ-19 コクゾウムシ圧痕資料（資料番号 K04 1048）

引用・参考文献

論文・書籍等

- 秋葉実解説 1988『武一郎蝦夷地紀行 渡島日誌（一）～（四） 西蝦夷日誌（七）～（八）』
「角川日本地名大辞典」編纂委員会編 1987『角川日本地名大辞典 1 北海道 上巻』
上條信彦 2014「「扁平石器」の形態的分布から見た円筒土器文化圏の動態-半円状扁平打製石器、挟入扁平磨製石器を中心に-」『青森県考古学』22, 3-21 頁
上條信彦 2015『縄文時代における脱穀・粉碎技術の研究』
木古内町史編さん委員会編 1982『木古内町史』
北日本縄文文化研究会 2011『北日本縄文時代大型住居集成』
工藤雄一郎 2012『旧石器・縄文時代の環境文化史』
小島朋夏 1999「北海道式石冠の分布とその意義」『北海道考古学』35, 47-60 頁
小林正史 2008「土器付着炭化物分析」『縄文時代の考古学』7, 143-156 頁
小林正史 2016「IV鍋のス・コゲからみた縄文・弥生時代の囲炉裏構造」『縄文時代の食と住まい』, 79-130 頁
齋藤 岳 2014「北東北・北海道の石冠・土冠と脚付石皿について」『青森県考古学』22, 23-55 頁
斉藤慶吏 2009「青森県縄文海進期前後における居住様式-小川原湖沼群周辺地域を対象として-」『青森県考古学』174, 27-40 頁
酒井秀治 2017「Ⅶ章 2 石器について」『木古内町 大平遺跡 (3)』北埋調報 328, 547-553 頁
阪口 豊 1984「日本先史・歴史時代の気候-尾瀬ヶ原に過去 7600 年の気候変化の歴史を探る-」『自然』5, 18-36 頁
坂本尚史・富永勝也 2020「北海道地方」『縄文石器提要』, 282-313 頁
設楽博己 2007「縄文-弥生移行期の葬制変化（東日本）」『縄文時代の考古学 9 死と弔い-葬制-』, 192-207 頁
鈴木正語 2004「木古内町における河川の河原礫について」『土・酒・海・山 故石本省三氏追悼論集』, 46-50 頁
高倉新一郎解説 1978『竹四郎廻浦日記』上
高橋和樹 2001「Ⅶ章 1 遺構」『白老町 虎杖浜 2 遺跡』北埋調報 158, 191-195 頁
高橋 哲 2007「石匙の使用痕分析-植物加工具としての石匙についての考察-」『考古学談叢』, 369-388 頁
高橋 哲 2011「円筒下層式土器期の石匙の使用痕研究」『特別史跡三内丸山遺跡年報』14, 54-69 頁
永田方正 1984『新版 北海道蝦夷語地名解』
永谷幸人 2017「北海道噴火湾沿岸の縄文貝塚と集落の動態」『北海道考古学』53, 5-24 頁
日本地質学会編 2010『日本地方地質誌 1 北海道地方』
秦光男・垣見俊弘 1979『木古内地域の地質』地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅) 地質調査所
三浦正人・田口 尚 2012「11 章 北海道」『木の考古学 出土木製品用材データベース』, 133-146 頁
宮内崇裕・八木浩司 1984「松前半島東岸の海成段丘と第四期地殻変動」『地学雑誌』93-5, 1-16 頁
山田悟郎・柴内佐知子 1997「北海道の縄文時代遺跡から出土した堅果類-クリについて-」『北海道開拓記念館研究紀要』25, 17-30 頁
山田秀三監修・佐々木利和編 1988『アイヌ語地名資料集成 (別冊) 東西蝦夷山川取調圖』
山田秀三 1983『アイヌ語地名の研究 第二巻』
渡辺一郎監修 2013「第 32 号 函館 (2)」『伊能図大全 第 1 巻 伊能大図 北海道・東北』, 111 頁

埋蔵文化財発掘調査報告書

- 青森県教育委員会 2012『三内丸山遺跡 38』
木古内町教育委員会 1974『札蒔遺跡』
木古内町教育委員会 1989『鶴岡 2 遺跡 I』
木古内町教育委員会 1990『鶴岡 2 遺跡 II』
木古内町教育委員会 1991『釜谷 4 遺跡』
木古内町教育委員会 1995『釜谷 5 遺跡』
木古内町教育委員会 1997『新道 3 遺跡』
木古内町教育委員会 1998a『亀川 2 遺跡』
木古内町教育委員会 1998b『亀川 3 遺跡』
木古内町教育委員会 1998c『泉沢 3 遺跡』
木古内町教育委員会 1999a『釜谷遺跡』
木古内町教育委員会 1999b『新道 2 遺跡』
木古内町教育委員会 2003a『新道 2 遺跡 II 北地点』
木古内町教育委員会 2003b『大釜谷 3 遺跡』

木古内町 幸連 4 遺跡

- 木古内町教育委員会 2003c『泉沢 2 遺跡A地点』
木古内町教育委員会 2003d『泉沢 2 遺跡 (B地点)』
木古内町教育委員会 2004a『泉沢 2 遺跡C地点』
木古内町教育委員会 2004b『蛇内遺跡』
北海道開拓記念館 1976『札苅』
(財)北海道埋蔵文化財センター 1986a『木古内町 建川 1・新道 4 遺跡』北埋調報 33
(財)北海道埋蔵文化財センター 1986b『木古内町 札苅遺跡』北埋調報 34
(財)北海道埋蔵文化財センター 1987『木古内町 建川 2・新道 4 遺跡』北埋調報 43
(財)北海道埋蔵文化財センター 1988『木古内町 新道 4 遺跡』北埋調報 52
(財)北海道埋蔵文化財センター 2002『八雲町 野田生 4 遺跡』北埋調報 171
(財)北海道埋蔵文化財センター 2011a『木古内町 木古内 2 遺跡』北埋調報 278
(財)北海道埋蔵文化財センター 2011b『木古内町 大平遺跡・大平 4 遺跡』北埋調報 280
(財)北海道埋蔵文化財センター 2011c『木古内町 蛇内 2 遺跡』北埋調報 281
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2012a『木古内町 大平 4 遺跡 (2)・蛇内 2 遺跡 (2)』北埋調報 292
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2012b『木古内町 木古内 2 遺跡 (2)』北埋調報 293
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2012c『木古内町 札苅 5 遺跡』北埋調報 294
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2012c『木古内町 札苅 5 遺跡』北埋調報 294
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2013『北斗市 館野 6 遺跡』北埋調報 295
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2014b『木古内町 木古内遺跡』北埋調報 304
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2014c『木古内町 釜谷 8 遺跡』北埋調報 305
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2015a『北斗市 押上 1 遺跡』北埋調報 312
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2015b『木古内町 新道 4 遺跡 (4)』北埋調報 320
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2016『木古内町 大平遺跡 (2)』北埋調報 321
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2017a『木古内町 大平遺跡 (3)』北埋調報 328
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2017b『木古内町 大平遺跡 (4)』北埋調報 329
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2017c『木古内町 泉沢 5 遺跡』北埋調報 330
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2017d『木古内町 大平 4 遺跡 (3)』北埋調報 331
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2017e『木古内町 亀川 5 遺跡』北埋調報 332
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2017f『福島町 館崎遺跡』北埋調報 333
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2018a『木古内町 幸連 3 遺跡』北埋調報 343
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2018b『木古内町 釜谷 10 遺跡』北埋調報 344
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2018c『木古内町 泉沢 6 遺跡』北埋調報 350
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2019『木古内町 札苅 5 遺跡 (2)』北埋調報 353
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2020『木古内町 札苅 8 遺跡』北埋調報 362
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2022a『木古内町 札苅 7 遺跡 (1)』北埋調報 368
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2022b『木古内町 幸連遺跡』北埋調報 369
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2023a『木古内町 札苅 7 遺跡 (2)』北埋調報 374
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2023b『木古内町 幸連 5 遺跡』北埋調報 375
松前町教育委員会 1974『松前町大津遺跡発掘報告書』
森町教育委員会 2006『鷺ノ木 4 遺跡』

報告書抄録

ふりがな		きこないちょう こうれん 4 いせき							
書名		木古内町 幸連 4 遺跡							
副書名		高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次									
シリーズ名		(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号		第 373 集							
編著者名		皆川洋一・鈴木宏行・坂本尚史・直江康雄・谷島由貴							
編集機関		公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
所在地		〒 069-0832 江別市西野幌 685 番地 1							
発行年月日		令和 5(西暦 2023)年 3 月 24 日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
こうれん 幸連 4 遺跡	かみいそぐん き こ ないちょうあざこうれん 上磯郡木古内町字幸連 110-13、111-4、112-9、 116-2・13・14、117-5・6		01334	B-05-60	41° 42'13"	140° 28'59"	20150512 ～ 20151102 20160509 ～ 20161028	10,255m ² (平成 27 年度 7,978m ² 、平成 28 年度 2,277m ²)	道路建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
幸連 4 遺跡	遺物包含地	縄文時代 前期後半	竪穴住居跡・土坑・盛土		土器 縄文時代前期後半(円筒下層 b1～d2 式)、中期後半(榎林式相当)、後期前葉(天祐寺式)石器 石鏃・石槍・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石斧・北海道式石冠・扁平打製石器・すり石・たたき石・石皿・垂飾など)			ボンクレ川沿いに形成された縄文時代前期後半、円筒下層 b1～c 式期の住居群とそれらの上に形成された円筒下層 d1 式の大型住居列	
		縄文時代 中期後半	竪穴住居跡・土坑・盛土						
		縄文時代 後期前葉	竪穴住居跡・土坑						
要約	<p>遺跡は JR 木古内駅から北東に 5.3km、津軽海峡に面した海岸線より 300m ほど内陸に位置し、ボンクレ川左岸の海岸段丘上に立地する。竪穴住居跡 43 軒、土坑 108 基、焼土 27 か所などが検出された。主な時期は縄文時代前期後半・中期後半・後期前葉で、特に縄文時代前期後半、円筒下層 b1～c 式期は川沿いの高位部に多数の住居群と大量の遺物が累積する廃棄域が形成され、その後の円筒下層 d1 式期にはその上に高さ最大 1m ほどの周提を巡らす大型住居が南北に列状に構築される。ボンクレ川の対岸の幸連遺跡にはこれらの時期のフラスコ状ピットが多数検出されており、セットで集落を形成していた可能性がある。</p> <p>遺物は土器等が 155,096 点、石器等が 306,216 点出土し、土器は前期後葉が大半の 93% を占め、中期後半が 3.6%、後期前半が 2.5% である。石器は近隣で採取可能な頁岩製の剥片類が大量に出土し、光沢のあるスクレイパーが目立つ。扁平打製石器・たたき石などの礫石器類も多く、使用痕分析・C/N 比分析結果とも植物利用頻度の高さを示すものと思われる。</p>								

(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第373集

き こ ないちょう こうれん
木古内町 幸連4遺跡

—高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—
第1分冊(本文編1)

令和5(2023)年3月24日

編集・発行 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌 685-1

TEL 011-386-3231 FAX 011-386-3238

URL <http://www.domaibun.or.jp>

E-mail mail@domaibun.or.jp

印刷 株式会社北海道機関紙印刷所

〒006-0832 札幌市手稲区曙2条3丁目2-34

TEL 011-686-6141 FAX 011-676-6684